

交流について考える

— 自ら体験し、偏見を捨て、相互理解に努めよう —

李 範錫

(韓国カトリック大学校言語文化学部日語・日本文化専攻・専任講師)

私は10年前、留学生として日本に渡り8年間の大学院生活を送って2年前韓国に帰ってきました。その間いろんなことを体験し、また学んできたつもりですが、その中で印象に残る経験を紹介し、交流について一つ考えてみました。

私は留学中、個人的な事情によりアルバイトと勉強を並行しておこないませんでした。仕事はビルの掃除で作業にはちょうど6名の人が必要でした。まず、一人が床に水と洗剤をかけ、後の一人が機械で床をあらう。そして、もう一人が汚れた水を集めてバケツに入れ、残りの二人がモップで水拭きをする。最後の一人がワックスを塗って扇風機で乾かす、という段取りになっていて時間のながれとともに床がきれいになっていくのです。この仕事は、6人全員が協力し、同時に働かないとうまく進みませんでした。なるほど、そこにそれまで知らなかった「和」を大事にする日本人の価値観を発見したのです。もちろん、どこの国でも同じようなことはあるでしょうが、自分の考え方を強調する傾向にある韓国人に比べて、日本人にはそれが格別であると感じられたのです。実は、以前に「日本人は"和"を大事にするんだ」ということをある本で読んだことがありました。そして、親しい日本の友人からも聞いたことがありましたがそれを実感したことがなかったのです。それが、上記のような経験を通してはじめて実感することができたのです。

このように私は「和」を大事にする日本人の価値観を本からでもなく、親しい日本の友人や学校からでもない、いわば日本社会との交流を通してはじめて実感した経験をもっています。

次に私はそれまで知らなかったもう一つの事実を発見しました。当時、アルバイトを一緒にやっていた仲間の中には言葉遣いは地元の方言色が濃く、髪の毛は茶色に染め、服装は普通の学生とは違う一見不良のように見られがちな人たちもいました。実は、それまで彼らのような人々を街で見掛けるとその外見から「だらしのない一、何考えているんだ」などと思っていたのです。それで、彼らにバイト先で出会った当初は一緒にやっていけるかな、仕事はうまくできるかな等と不安な気持ちを抱いていました。休憩のときにも彼らと離れた場所で休憩をとったりもしました。ところが、時間が経つにつれ私がそう思っていたことが恥ずかしくなってきたのです。つまり、一緒に働いているうちに今まで自分が偏見をもっていたことに気がついたのです。

彼らは仕事をやる中で怠けることなく、自分に任されたことをきちんとやっていました。また、自分なりの目標をもってアルバイトをやっていました。真面目な人だったのです。それに、話しを交わしているうちに地元の方言で語る彼らには都会の人々に比べて、暖かい心をもっていることに気づいたのです。もしその時彼らとの出会いがなかったなら、おそらく今も私は日本の茶髪少年はみんな不良少年だと思っていたかもしれません。

このような経験は、相手に対する偏見を捨てて接する必要があることを示すものではないでしょうか。本当の相手を知らずに自分の思い込みで判断することがどれだけ危険かをつくづく感じました。

最近、韓国と日本の中で交流が活発に行なわれています。特に本年(2002年)に開かれるサッカーW杯共同開催をきっかけに民間レベルでの文化交流はますます増えていくだろうと思います。その際、必要と思われる点を考えてみました。

まず、できるだけ自ら進んで交流の機会をもち、肌で感じることです。特に今日はいわゆる情報化時代ともいわれ、我々の周りにはいろんな情報が山ほどあります。インターネットや映像を通じて世界中のいろんな情報が簡単に手に入るようになりました。また、人々の往来も増し人々から得る情報も以前より多くなったと思われます。そのなかには私たちに有益な情報もたくさんあると思います。しかしながら、そのような情報は自分で、自分の五感で得る情報とは違います。重要な情報とはいえ実感できないこともあり、中には有害な情報もあると思われます。そこで、ときに振り返ったり寄り道をしたりすることのできる情報をも必要なのです。

次に、偏見をすてることです。例外は常に存在しうることをも認識してほしいのです。実際、さきほどの例で「日本人は「和」大事にする」との話をしましたがこれもまた例外はあるのです。日本人みんなが集団の「和」を強調するとは限りません。中にはグループの **harmony** より、独創性の大切さを認識し、一人一人の個性を大切にすることもたくさんいると思います。ある程度の傾向はあるにせよ、みんながそうであると決めつけ何気なく振る舞ったことが相手にとっては許しがたいことになるかもしれません。

最後に交流とは結局、言語や風俗、習慣などといった異文化への理解だと思われませんが、その過程において重要なことは「相互理解」です。まず相手の文化を理解し、自分の文化を相手によく理解してもらい相互理解でなければなりません。片寄った押し付けは、相互誤解を生じトラブルの原因ともなるのです。相手の文化を理解するよう努力し、また相手に自分の文化を理解してもらいよう努力するのが肝要です。それにはお互いが話し合う機会を多く持たなければならないと思います。

국제교류를 위하여

이 범 석

최근 한국과 일본 사이에 활발한 교류가 이루어지고 있음은 여러분도 잘 알고 있으리라 생각합니다. 특히, 금년(2002년)에 열리는 월드컵 축구의 한일공동 개최를 계기로 민간부문에서의 양국간 교류는 금후 더욱더 증대 되리라 생각합니다. 이에 우리 가톨릭 대학교 일어일본문화 전공에서는 일본의 국립신슈대학을 비롯하여 5개교와 실질적인 국제친선교류 행사를 진행하고 있으며, 향후 일본의 각지역을 고려한 교류활동을 더욱더 활발하게 넓혀 나아갈 계획을 가지고 있습니다. 특히 현재 연간 13명에 달하는 교환 학생을 파견하는등 국내 어느 대학(일본관련학과)에서도 찾아볼 수 없는 활발한 활동을 하고 있습니다. 따라서, 여러분들의 많은 관심과 적극적인 참여를 기대하며 아울러 한가지 당부에 말씀을 드리하고자 합니다.

먼저 보다더 적극적이고 능동적인 자세로 임하여 직접적인 체험과 느낌으로 일본에 대한 객관적인 이해와 견문을 넓혀 주길 바랍니다.

특히, 오늘날은 인터넷을 비롯하여 TV나 신문등 매스미디어를 통하여 가까운 이웃나라 일본은 물론, 세계각국의 정보를 순시(瞬時)에 얻을 수 있으며, 또한 인적교류도 활발하게 이루어지고 있습니다.

이로인해 우리주변에는 무수히 많은 정보가 있으며, 얻고자 하는 정보에 손쉽게 접근할 수가 있습니다. 그러나 그러한 정보는 본인의 오감(五感)으로 터득하는 것과는 분명 차이가 있다고 생각합니다. 우리에게 아주 중요하고 유익한 내용이라 할지라도 그것을 실감 하기란 그리 쉬운 일이 아니며, 본인이 직접보고 듣고 느끼는 것과는 큰 차이가 있게 마련입니다. 또한 그러한 정보에는 우리들에게 오히려 유해한 것들도 있다는 것을 염두해 두어야 하겠습니다. 최근 우리 주변에는 일본에 대하여, 나아가 이문화(異文化)에 대하여 보다더 올바르게 유익한 정보보다는 설익고,요란스럽고,왜곡된 정보들이 오히려 활개를 치고 있는 듯 하여 안타깝게 생각하고 있습니다. 시행착오를 겪더라도 자기 스스로의 경험을 통하여 피부로 느끼고 생각하는 그러한 교류가 되기를 바랍니다.

그리고, 한가지 덧붙이자면 국제교류라고 하는 것은 결국 언어,풍속,습관,가치관등 이 문화에 대한 참된 이해라고 생각합니다. 이때 무엇보다 중요한 것은 어느 한쪽만의 일방적인 교류가 아니라 「상호교류」가 이루어져야 된다고 생각합니다. 즉, 상대의 문화를 이해함과 동시에 우리의 문화를 상대에게도 잘 이해시키는 그러한 「상호교류」가 되어야 합니다. 그러기 위해서는 우리 문화에 대한 충분한 지식을 가지고 있어야 할 것이며 또한 긍지를 가져야 될 것으로 믿습니다. 또한 선입감 혹은 편견을 버리도록 합시다. 어느정도의 경향은 있지만 모두가 다 똑같은 것이다,라는 생각으로 접근 할 것이 아니라 항상 예외가 있다는 것도 염두해 두어야 하겠습니다. 어떠한 편견이나 선입감으로 부터 시작되는 교류에서는 이문화에 대한 올바른 이해와 객관적인 판단은 기대할 수 없다고 생각합니다.